

赤星

月刊

5月2006年 No.55 (通巻397号)

本号300円

年間購読料 1部3000円 (送料別)
(送料) 密封1000円 開封800円

THE SEKISEI (RED STAR/ROTE STERN)

編集 共産主義者同盟 (DER BUND DER KOMMUNISTEN)

発行所 蜂起社 東京都江東区大島3-9-25/TEL 03-5626-8262

発行人 南 安明 (振替) 00120-2-1512 蜂起社・南安明

紙面案内

- ① パレスチナ/沖縄
- ②-③ 反グローバリズムのプロレタリア階級論 (I)
- ③ 反排除の闘い大阪・東京/共謀罪
- ④ 日米合意弾劾/沖縄報告/反戦実

お知らせ 次号は6月中旬発行です。

燃え上がれ怒りの抵抗! さえぎる壁を乗り越えて

「持たざる者」の連帯を!



5・15浦添キャンプ・キンザー包囲デモ



5・14宜野湾市民会館で開かれた「アジアから米軍基地をなくそう沖縄集会」

パレスチナ・ハニヤ政権への経済制裁を許すな!

イスラエル首相オルメルは、訪米し5月23日、米大統領ブッシュと会談。オルメルは、占領地ヨルダン川西岸に点在する中小規模のユダヤ人入植地を大規模な入植地に再編・統合して、自国領に「併合」、建設中の隔離壁を「国境」として一方的に画定する、というパレスチナ「分離」政策を改めて表明した。ブッシュは、これを承認する意向を示した。

一方、ハマス主導のパレスチナ・ハニヤ政権が発足して1カ月が経ったが、米欧諸国の援助停止「兵糧攻め」で外国の経済援助に頼らざるを得ないパレスチナの財政やイスラエル支配の構造が事態を深刻化している。

パレスチナ自治政府の2005年の予算規模は38億ドル(約4200億円)で歳入のうち43%は、イスラエルが代理徴収してきた関税や税金などの還付である。イスラエルはハマス政権発足での関税などの自治政府への引き渡しを凍結した(首相訪米前に一部の凍結解除を表明)。

パレスチナの輸出入は、イスラエルが直接の取引を認めないため同国の港湾、空港を経由せざるを得ない。イスラエルからの還付金と外国からの財政支援を合わせると歳入の6割を占める。ハニヤ政権の窮状は極めて深刻だ。自治政府の歳出のうち約16万5千人の公務員(そのうち約6万人が治安要員)の給与支払

いが52%を占めている。パレスチナのザハル外相は、アジア歴訪を前にした会見で日本が米欧に迫って対パレスチナ支援を凍結した点について、「日本は、イスラエルの味方だ」と意図表示した。将来の我々との関係にも影響が出るだろう」と厳しく批判した。

国際法にも違反したイスラエルの占領・入植・隔離壁建設を放置しているにもかかわらず、このイスラエルを認め難民の帰還権の放棄を迫る経済制裁/財政支援停止を許してはならない。

沖縄民衆の怒りに連帯し 安保粉砕・新基地建設阻止!

72年5・15「返還」(日本復帰)から34年を迎えた沖縄民衆は、安保による基地重圧、名護市辺野古新基地建設に対する怒りをますます研ぎ澄まししている。

辺野古で海上新基地建設を阻止する闘いに立ち上がっている平良夏芽氏の沖縄タイムスに掲載された論説(抜粋)を紹介する。

「日米両政府が、老朽化して使いにくくなった普天間基地の完全返還を発表し、引き換えに新しい基地建設を『負担軽減のための移設』と発表してから十年目を迎えている。逆らっても止めようがないとのあきらめの声飛び交う中で、名護市民は住民投票で『否』を宣言し、さらに激しい阻止行動によって何一つ工事を許さなかった。

身を削るような座り込み、文字通り体を張った阻止行動。身も心もボロボロになりながら阻止行動を継続している中で、沿岸家が発表された。〈中略〉

島袋市長が沿岸家の規模を拡大してV字型の滑走路案へ合意したとき、『前の市長も受け入れてたよ。何も変わらない。止めるだけだよ』とト村はうろたえなかった。

稲嶺知事が危険の除去を理由に、キャンプ・シユフの兵舎地区にヘリポート建設の容認を発表したが、これとテント村を不安にさせる要素にはならない。これまでも県知事と名護市長が合意した案に反対し、止め続けてきたのだ。何も変わらない。止めるだけである。〈中略〉

韓国の辺野古と呼ばれているジョンテクという地でも米軍基地の拡張が強行されようとしている。四日には、数百人の農民を数千人の機動隊や軍隊が襲い、百人以上の負傷者を出した。米軍基地拡張のために国民が負傷することもいとわらない。これが米軍再編の実態なのである。

私たちは、現実をしっかりと見つめるべきである。『返還』や『復帰』『負担軽減』という言葉で何がなされてきたかを思い起こすべきである。新基地建設を完全に拒否し続けることがどんなに困難なことか分かっている。止め続けるという決意を『夢物語』と笑う人々がいることも知っている。では、合意する人たちは何を合意するの

か。米兵の事件・事故が永久に続くことを合意するのか。世界の罪もない子どもたちを殺し続ける米軍基地を拡張、建設し、世界から恐れられ、憎まれることを合意するのか。基地を沖縄に置き続けることが前提となつた計画をなぜ私たちは『合意』しなければならぬのか。

私たちは、人殺しに合意などしない。その準備にも合意しない。それが大きくても、小さくても、どんな形をしても、合意してはならないのである。」

(平良夏芽・沖縄うふざと教会牧師。辺野古で海上基地建設の阻止行動に携わる平和市民連絡会共同代表。5月15日付沖縄タイムス「日米『合意』と沖縄」)

反グローバルバリスムのプロレタリア階級論

〈横渡〉

《I》

はじめに

「プロレタリア階級論」は、資本主義の矛盾を解明し、資本主義を克服するための「階級闘争」を提唱し、「変革主体」を指定する。それは、グローバルバリスムがもたらした失業と貧困、競争と排除によって、貧しい「持たざる者」と豊かでない「持てる者」との階級的な格差と矛盾・対立が拡大している中で、グローバルバリスムによる時代の変容と、とりわけ階級構造と労働市場の再編——に対応して「階級論」を再構成すること、社会を根底的（フンディカル）に批判し変革する理論的武器を鍛え上げるために決定的に重要であると考えられる。

マルクス主義階級論の特徴

本思想と階級的立場の土台となっているのが「階級論」なのである。

マルクス主義階級論の再生

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

下向的分析と上向的分析の方法

マルクス主義理論的思考の前提は、何よりも我々が存在し生活している資本主義社会（ブルジョア階級社会）の生きた具体的現実から出発して、変革すべき対象世界（階級社会）の構造と変革の主体的条件を明らかにすることである。まさに言葉の真の意味

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

を理解していったことである。

第③に、従来の階級構造

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

「階級論」ならびに階級論関係、階級構造の分析は、マルクス主義にとって中心概念（キー・ワード）の一つである。それは「革命への展望」を導き出すための「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。この「階級論」は、変革すべき資本主義社会の仕組み——人と人との社会的関係が「生産手段の所有関係」として表裏に現れる。

（3）面に続く

5・11-12世界バラ会議開催に抗議 反排除大阪現地闘争に起つ



5月12日、世界バラ会議会場・大阪国際交流センター前で抗議行動を貫徹。

1月30日の大阪市による朝(うつ)公園、大阪城公園での行政代執行強制排除に抗議する反排除の取り組みが、排除の名目となった世界バラ会議開催に対する抗議行動・反排除全国集会として、5月11、12日の2日間に行われ、全国の仲間を集めて闘い抜かれた。

11、12大阪現地闘争が取り組まれた。11日夜には、バラ会議のナイトツアーと称して朝公園を訪問するイベントが予定されていたが抗議行動の前に、迂回して通過するだけで終わった。翌12日、世界バラ会議の会場・大阪国際交流センター前には、市職員と警察で埋め尽くされる。抗議部隊は、二手に分かれて権力の制動をかくくぐり、会場正面前に登場して怒りのシュプレヒコールを叩きつける。会議参加者のバスはまたしても迂回を余儀なくされる。

5・8 対都庁行動に 2000名が結集

5月8日、「新規流入防止」にNOを対都庁行動が約2000名の結集で闘われた。当日は、3、4月の桜橋のデモ、テラスをめぐる攻防を勝ち抜いてきた隅田川の仲間をはじめ、山谷・上野、渋谷、新宿など予想を超える各地の野宿労働者、とりわけ移動層の仲間の新たな参加が目立ち、さらに支援者も加わり、都庁前の歩道は怒りの熱気で埋め尽くされた。

行動は、都庁に向けてのシュプレヒコールで始まり、集会では各地の仲間の決意表明、争闘連、4・30自由と生存のメーデーへの弾圧抗議、荒川・墨田・山谷実行委などの連帯アピールが続き、並行してヒラ情宣を展開。そして都知事、建設局、福祉保健局へ抗議ならびに申し入れ書が担当者へ渡された。

共謀罪を葬り去れ! 法務委員会採決を阻止

現代の治安維持法・共謀罪をめぐる攻防は、文字通りの最大の正念場に入りました。政府与党は、何として今国会成立をこの意気込みで、4月21日に衆院法務委員会の審議入りを行おうと28日の連休前採決を図るが、国対の回避方針で頓挫。連休明けの5月10、12、16の法務委での採決の目論みもならず、与党は再修正案をもって野党に歩みよるが失敗。19日には新聞各紙紙面にも「共謀罪法案採決」と打ち出し、もはや強行採決不可避と思われたが、何と衆院議長仲代先送りになるという前代未聞の事態となった。5月24日現在、法務委員会は未方針状態で共謀罪をつぶすことは可能な情勢になってきた。このことは何よりも大衆運動の力で世論、野党、国会、マスコミを突き動かしてきた成果である。今こそ手を緩めることなく、完全に葬り去るまで闘い抜こう。

会前突入集会と27日の集約集会にはそれぞれ100人以上が集まり、その間、27日の超党派議員と市民の緊急院内集会には250人、夜の日弁連主催の集会は500人余が集まり、労組、市民運動、宗教者、NGO、ジャーナリストなど急速に同心と反対の声が広がっていった。テレビのニュース番組でも共謀罪の特集を続々と組み、新聞の4コママンガの素材にもなった。28日も国会前は200人以上、院内集会所も2カ所で行われる中、強行採決は阻止された。連休明けに法務委員会の審議入りはすべて朝から情宣、国会前入り込み、屋集いが持たれ、各地から新たな参加者が合流しだす。とりわけ、関西から全日建連帯労組関係者や、都や全港の仲間が、5月

4月30日、東京・原宿において「自由と生存のメーデー06」がフリーターなど不安定雇用と社会的に差別・排除された者たちがアピールする行動として1000余名の参加で行われた。集会後のデモは、膨大な数の警察権力によって暴力的に規制され、その中で3名が不当にも逮捕された。それ「道路交通法違反」を名目に、サウンド機材を積んだ車ごと強奪し、何と車の

自由と生存のメーデー 3名逮捕の弾圧抗議

同乗したDJまで逮捕されるという理不尽極まりない弾圧である。さらにデモ中に抗議した参加者が「公務執行妨害」で逮捕された。街頭デモの自由(とりわけサウンドデモ)をあらかじめ封殺し、弾圧を画策した警察権力の暴挙を怒りを込めて弾劾する。3名は5月11日まで全員専断。11日には不当弾圧に抗議する緊急集会が新宿で140名もの参加で勝ち取られた。

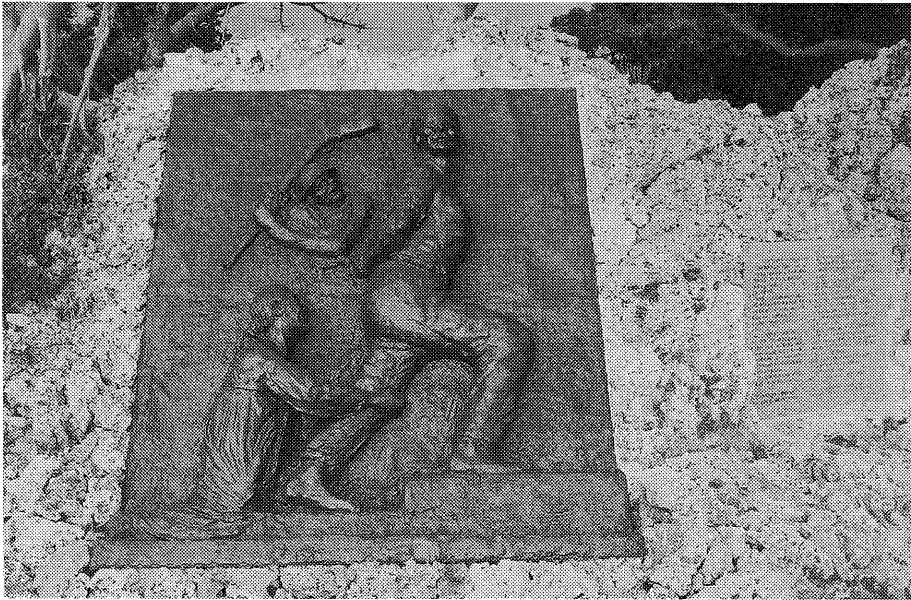
(2面から続く) 日本では女性労働者の半数の輸入にエネルギーを使い果たし、「生きた現実」から出発して理論を再構成する努力を怠ってきたためである。社会的に周縁(マージナル)化された人々は労働運動の多数派からも周縁化され切り捨てられた。多数派は、多様な問題に對して多岐にわたる、せいぜい副次的・二義的な問題として扱ってこよう。多数派であるがゆえの「多様性」を自ら裏切った。この紛れもない思想的「怠慢」は日本の新旧左翼が抱える問題の一例にすぎない。自ら「立ち遅れ」を自覚できないから、なぜ日本の左翼は「社会的排除」を問題にしないか、見て見ぬ振りをして、この現実を不問に付す限りの労働者の「統一」と団結は抽象的に(欺瞞的に)しか語れないのだ。

労働者は、プロレタリアとして、すなわち搾取され抑圧され辱められた被支配階級として「持たざる者」が革命の実践によって自己を乗り越えること、すなわち自己変革を前提にした革命なのである。マルクスは1850年9月15日、共産党中央委員会の会合で、プロレタリアは「単に体制を変えてだけなく、自身を変え、自らを政治的に支配しなさい」というために「長く険しい闘いのために」(マルクス、1978年)序論13頁、1978年)「わたくしが提案しつつある分析は、それゆえ原典のもつ権威だけによりかかるわけにはいかなない。マルクスは一方では経済的水準の第一義性を主張し、他方でははつきりとイデオロギイ的・政治的諸関係の見地から諸階級を位置づけているのであるが、そこには、たとえ矛盾ではないにしても、基本的な両義性が存在するのは明らかである。」(フアン・ハント『階級と階級構造』法律文化社、1979年)

「労働者階級の確定とは、それゆえ、どの経済的基準を選択すべきかをめぐる論争の問題ではない。すなわち、階級的境界のきりぎりの決定因は『生産的労働』なのかそれとも『賃労働』なのかと争うことに、それを還元することはできないのである。……労働者階級を規定して賃労働者であり、かつ生産手段の非所有者である人びとのこととする把握は、労働者階級の可能的、または潜在的な境界を与えているのである、と論じていることができる。商業労働者であれ国家の被雇用者であれ、およそ個々の部類の労働者が労働者階級の一部を形成しているか否かという問題は、経済的水準のみで決定されない。」(前同)

③「ポスト冷戦期の民主化、グローバル化、そして情報革命を経た韓国では、中心と周縁の問題は新たな次元で定義されなければならない。民主化は、分断体制のもとで周縁化された人びとの復権を果たす過程でもあった。……グローバル化やこれに對する新自由主義的経済政策がホームレスや外国人労働者に象徴される新たな周縁的存在を生み出している。」(文京殊・立命館大学教授「韓国現代史」岩波新書)

日米同盟の再編弾劾・沖縄新基地建設阻止!



読谷村瀬名波に建立された「恨之碑」(5月13日)



キャンプ・キンザー包囲デモを闘い抜く(5月15日)

日米両政府は5月1日、外務・防衛担当閣僚による日米安保協議委員会(2プラス2)を米国務省で開き、在日米軍再編に最終合意した。共同発表によれば「再編案の実施により同盟関係における協力は新たな段階に入る」という。このことは、世界規模で展開する米軍のために自衛隊が司令部間の連携も含めて一体化して協力することを意味している。国会審議もまともになされぬまま、なすすじに進められる日米同盟の再編―大転換は、沖縄をはじめとする基地機能の強化につながるものだ。

日米合意に先立って発表された辺野古への県内移設―新基地建設の計画案は何と1800メートルの滑走路を本も造るといふ強

大な軍事基地構想であることが明らかになった。住民生活や豊かな自然に与える影響は計り知れない。「戦後初めて県民の意思で基地を造るかどうかが問われている。容認すれば、県民が進んで受け入れたという誤ったメッセージを次世代に発信し、基地の固定化をもちたすことになる」(沖縄タイムス・5月15日社説)というように、名護市長の合意に対して地元では怒りが渦巻いている。

さらに稲嶺知事は「外交・国防は国の専管事項」など発言したが「沖縄戦から戦後の米軍統治へと続く『国策』で、沖縄がいかに苦難の道を歩んだか。国の専管事項で片付けられてはたまらない」(琉球新報・5月15日、社説)という憤

りは当然だ。4月28日には辺野古崎に隣接する宜野座村議会が全会一致で新基地建設反対を決議した。沖縄に新たな基地負担を押しつける日米合意を弾劾する。この間、米軍再編が進む韓国では、最大級の米軍拠点を撤去する決定がなされた。米軍再編が進展する中、基地拡張が決まったジョンテク(金澤)基地において、基地拡張阻止に立ち上がった住民に対して当局は軍・警察を投入する大弾圧にのりだした。5月4日には、占拠闘争をもつて抵抗する住民・支援者約600人を拘束し、多数の負傷者を出した。この暴挙に抗議するとともに、不屈に闘う韓国民衆と連帯し、沖縄・韓国を結び、さらに岩国、座間など各地の反基地闘争とともに日米安保の再編と対決して闘おう!

5・13 読谷村瀬名波 朝鮮人軍夫追悼 「恨之碑」除幕式

5月13日、読谷村瀬名波において「アジア太平洋戦争・沖縄戦被弾朝鮮半島出身者追悼除幕式及びレセプション」が行われた。これは沖縄戦に強制動員された元朝鮮人軍夫たちを追悼するとともに、歴史を学び共生平和を誓う象徴として建立されたものである。韓国では1999年に、も

「この島はなぜ寡黙になつてしまったのか。なぜ語りつけないのか。女たちの悲しみを、朝鮮半島の兄弟たちのことを、引き裂かれ、連行された兄弟たち、灼熱の船底で息絶え、沖縄の地で手足をもち取られ、魂をふみにじられた兄弟たち、戦が終わる、時が経つてもこの島から軍靴の音が絶えることはない。奪われた土地は、消えたムラ、女たちの悲鳴は続き、人々の心は乾いたまままだ兄たちよ、未だ供養されず石灰岩の裂け目に埋もれる骨、骨、故郷の土饅頭に帰ることもかなわない兄たちよ、私たち沖縄人は未だ軍靴に踏みじられたままの、兄弟たちの魂に深く頭を垂れる。日本軍の性奴隷として踏みじられた姉たち、軍夫として犠牲になった兄たちに深く頭を垂れる。やがて固く結んだ鳳仙花の種が弾け、相互の海を越えて花咲くことを信じて、兄弟よ、あなたたちの辿った苦難を語り継ぎ、地球上から戦争と軍隊を根絶することを、この地に果たした兄姉の魂に、私たちは誓う」

以下、碑文と説明文を全文引用する。

碑文「この地に果てた兄弟の魂に」

「この島はなぜ寡黙になつてしまったのか。なぜ語りつけないのか。女たちの悲しみを、朝鮮半島の兄弟たちのことを、引き裂かれ、連行された兄弟たち、灼熱の船底で息絶え、沖縄の地で手足をもち取られ、魂をふみにじられた兄弟たち、戦が終わる、時が経つてもこの島から軍靴の音が絶えることはない。奪われた土地は、消えたムラ、女たちの悲鳴は続き、人々の心は乾いたまままだ兄たちよ、未だ供養されず石灰岩の裂け目に埋もれる骨、骨、故郷の土饅頭に帰ることもかなわない兄たちよ、私たち沖縄人は未だ軍靴に踏みじられたままの、兄弟たちの魂に深く頭を垂れる。日本軍の性奴隷として踏みじられた姉たち、軍夫として犠牲になった兄たちに深く頭を垂れる。やがて固く結んだ鳳仙花の種が弾け、相互の海を越えて花咲くことを信じて、兄弟よ、あなたたちの辿った苦難を語り継ぎ、地球上から戦争と軍隊を根絶することを、この地に果たした兄姉の魂に、私たちは誓う」

5・13 - 15 韓国民衆との連帯・反基地を結び 沖縄現地行動を闘う

5・13 読谷村瀬名波 朝鮮人軍夫追悼 「恨之碑」除幕式

5月13日、読谷村瀬名波において「アジア太平洋戦争・沖縄戦被弾朝鮮半島出身者追悼除幕式及びレセプション」が行われた。これは沖縄戦に強制動員された元朝鮮人軍夫たちを追悼するとともに、歴史を学び共生平和を誓う象徴として建立されたものである。韓国では1999年に、も

「この島はなぜ寡黙になつてしまったのか。なぜ語りつけないのか。女たちの悲しみを、朝鮮半島の兄弟たちのことを、引き裂かれ、連行された兄弟たち、灼熱の船底で息絶え、沖縄の地で手足をもち取られ、魂をふみにじられた兄弟たち、戦が終わる、時が経つてもこの島から軍靴の音が絶えることはない。奪われた土地は、消えたムラ、女たちの悲鳴は続き、人々の心は乾いたまままだ兄たちよ、未だ供養されず石灰岩の裂け目に埋もれる骨、骨、故郷の土饅頭に帰ることもかなわない兄たちよ、私たち沖縄人は未だ軍靴に踏みじられたままの、兄弟たちの魂に深く頭を垂れる。日本軍の性奴隷として踏みじられた姉たち、軍夫として犠牲になった兄たちに深く頭を垂れる。やがて固く結んだ鳳仙花の種が弾け、相互の海を越えて花咲くことを信じて、兄弟よ、あなたたちの辿った苦難を語り継ぎ、地球上から戦争と軍隊を根絶することを、この地に果たした兄姉の魂に、私たちは誓う」

以下、碑文と説明文を全文引用する。

碑文「この地に果てた兄弟の魂に」

「この島はなぜ寡黙になつてしまったのか。なぜ語りつけないのか。女たちの悲しみを、朝鮮半島の兄弟たちのことを、引き裂かれ、連行された兄弟たち、灼熱の船底で息絶え、沖縄の地で手足をもち取られ、魂をふみにじられた兄弟たち、戦が終わる、時が経つてもこの島から軍靴の音が絶えることはない。奪われた土地は、消えたムラ、女たちの悲鳴は続き、人々の心は乾いたまままだ兄たちよ、未だ供養されず石灰岩の裂け目に埋もれる骨、骨、故郷の土饅頭に帰ることもかなわない兄たちよ、私たち沖縄人は未だ軍靴に踏みじられたままの、兄弟たちの魂に深く頭を垂れる。日本軍の性奴隷として踏みじられた姉たち、軍夫として犠牲になった兄たちに深く頭を垂れる。やがて固く結んだ鳳仙花の種が弾け、相互の海を越えて花咲くことを信じて、兄弟よ、あなたたちの辿った苦難を語り継ぎ、地球上から戦争と軍隊を根絶することを、この地に果たした兄姉の魂に、私たちは誓う」

5・14 宜野湾市海浜公園野外劇場で、「5・15 平和とくらしを守る県民大会」が開かれ、本土からの平和行進参加者も参加して約3500人が集まった。集会に先立って、ロック歌手のMarieさんが約1時間わたって熱唱。かつて喜屋武マリィwithデューサとして活躍、世界各国で平和や貧困問題を訴える活動を続けてきたが地元で歌うのは15年ぶりだ。大会では、日米合意と新基地建設に反対する宣言が発せられた。

夕刻からは宜野湾市民会館ホールで「5・14アジアから米軍基地をなくそう沖縄集会」が、沖縄行動の呼びかけで行われ約1500人が参加した。集会は、まよなかしんやさんと趙博さんの歌でスタート。沖縄と韓国の連帯を目指す会の西尾市郎牧師が開会のあいさつ。韓国・平澤からは、現地の闘いの渦中ゆえに参加できなかったが、スライドで闘いと弾圧の状況が伝えられた。その上で、韓国

からはグリーンコーリア(緑色連合)のメンバーが参加して、韓国における米軍再編の現状を報告し、辺野古への移設は韓国にとっても重要、互いに関心をもちて連帯を推し進めようというメッセージを込めてスピーチした。沖縄の反基地闘争の取材で訪れたハンギョレ新聞の記者も紹介された。

続いて、ヘリ基地反対協を代表して安次富浩さんがあいさつ。稲嶺知事の言う「国防は国の専管事項」は言い訳だ。国防を国に任せっきりにしたことで、アジアの人々に大きな罪を犯し、広島・長崎・沖縄の事態を招いた。正しくない国策に反対しては民衆は抵抗してつづけることができる。辺野古の闘いはそのことの証だ。韓国の闘いに学び、国際的な連帯と非暴力・抵抗を貫

4・30 まよなかしんやさん迎え 反戦実集会・デモ

4月30日「沖縄―韓国―全国の反基地闘争が結合し新日米同盟を粉砕しよう」4・30反戦実集会が、読谷区新橋区民会館で約70名の結果で勝ち取られた(主催・反戦闘争実)。

沖縄からは、まよなかしんやさんが、おなじみの歌を披露した上で、新基地建設をめぐる状況を報告し来る5・13・15の闘いへの結果を呼びかけた。続いて特別報告として、AWC山口の仲間から、住民投票で勝利した岩国の闘いとその地平について報告された。26反戦実討論会に続いて参加した神奈川県共闘会、事務局長の檜原さんからは、座間の闘いについて闘おうと訴えた。

普天間爆音裁判原告団長の島田善次牧師は、沖縄で行われていることは必ずすべてのところに来る。日本人全体をからめとるのに沖縄をテストしている。そのことを肝に銘じて連帯を強める時だ。もの言わぬ民は滅びると説いた。さらにアメリカのNGOメンバー、自衛隊誘致を白紙撤回させた宮古・下地島からの報告などの発言を受け、金城美さんの締めあいさつで盛況のうちに終了した。

翌日15日は、浦添市民行動キャンプ・キンザー包囲デモが闘い抜かれた。集まった約80人は、基地の周りをデモしながら「米軍は沖縄から、アジアから出ていけ」と怒りのコールを基地に向かって叩きつけた。